

論文「ナイン」の構造論文集

「ナイン」は「変化したもの」と変化したもの「はたくさん出ているが、この物語の中心となっている最も変化したものの代表は正太郎であり、全く変化したものの代表は英夫と常雄である。そして最終的には「わたし」が変化したものの重要性に気づく。

正太郎について説明する。正太郎はチームのリーダーから詐欺師というように変化した、その変化を周りの人々は落ちぶれてしまったと、とらえている。

英夫と常雄について説明する。英夫と常雄は正太郎が変化しても、変わらず正太郎がチームのメンバーのためになることをしている、とらえている。その理由は結果的に正太郎がしたこと、今も昔もよいことが起こっていて、昔は英夫のために日陰を付くつて、そのおかげで完投することができ、今はお金をだまし取られてから本気で仕事をできるようになったので、信じ続けることができたからである。

「わたし」はそのことを英夫との会話の中の、206頁2行目「常雄にしても、正ちゃんを憎みながら、感謝しているところもあるだろうと思うんです。」で知ることになった。」

西日をチームのメンバーで遮ることで、チームが団結していることが目に見えてわかる。日陰を作るといのは、チームの団結を意味して、ビルが西日を遮っているのは、まだチームが団結していることを意味する。つまりこの物語において西日はチー

ムの団結の有無を表している。

「ナイン」は「変化したもの」と変化したもの「はたくさん出ているが、この物語の中心となっている最も変化したものの代表は正太郎の評価であり、全く変化したものの代表は英夫の正太郎への信頼である。そして最終的には「わたし」が変化したものの重要性に気づく。

「正太郎の評価」について説明する。正太郎の評価は、キャプテンから詐欺師というように変化した、その変化を周りの人々は悪いことだととらえている。

「英夫の正太郎への信頼」について説明する。英夫の正太郎への信頼は正太郎の評価が変化しても、変わらず正太郎のことを僕らのキャプテンだと、とらえている。その理由は、中村（英夫）さんが仕事で精を出すようになったり常雄の奥さんが別人のようになったのは正太郎は一見悪いように見えるが、ぼくらのためにしたからである。「わたし」はそのことを英夫との会話の中の、206頁11行目「結局は、僕らのためになることをして歩いているんだ」で知ることになった。

「ナイン」は「変化したもの」と変化したもの「はたくさん出ているが、この物語の中心となっている最も変化したものの代表は正太郎であり、全く変化したものの代表は仲間が正太郎を思う気持ちである。そして最終的には「わたし」が変化したものの重要性に気づく。

正太郎について説明する。正太郎は新道少年野球団の主将から仲間寸借詐欺をしてだますというように変化し、その変化を周りの人々は新宿区少年野球大会の準優勝チームの主将だった子が、どうしてそこまで崩れてしまったのか、またなぜだまされた仲間たちは正太郎をかばって警察へもどこへも届けなかったのか、ととらえている。

仲間が正太郎を思う気持ちについて説明する。仲間が正太郎を思う気持ちは正太郎が変化しても、変わらず正太郎は結局は自分たち仲間のためになることをして歩いているんだと、とらえている。その理由は決勝戦の時に西日が当たってぐったりしていると、正太郎が前に立ち日陰を作って助けてくれた。その気持ちは今でもどこかに残っている仲間が信じているからである。

「わたし」はそのことを英夫との会話の中の、²⁰⁶頁10行目「正ちゃんは一見、悪のように見えるけど、やはり僕らのキャプテンなんですよ。」で知ることになった。

決勝戦の時西日がさしてみんなを苦しめた。そこで正太郎が日影を作って助けた。今西日がささなくなったというのは、正太郎は今も仲間のために姿はないが日影という存在として、仲間のことを思い助けているということを表している。